

第五章 博覧会における展示空間の秩序化と民衆の受容

展示空間は、明治になると国民の「自主の精神」の涵養する場として、政府に期待されるようになる。しかし「自主の精神」の中身、つまり博物館、博覧会に期待された教育は、常に差し迫った現実の困難に対する解決策でしかなかった。したがって、明治期をとおして、その教育に関する本質的な議論はほとんどないままに、博物館、博覧会の実践のみが積み重ねられていったことは、第四章で確認したとおりである。本章では、前章で取り上げた社会的、思想的な背景を踏まえ、明治期の展示空間の実際および、一般の人々の受け止め方を検討していく。

なお、本章では主として博覧会をとりあげる。というのも、前章で述べたように、明治期においては「庶衆」にたいする教育はおもに博覧会が担っていたためである。また、明治期の博覧会で蓄積された展示空間の創設に関連した取り組みは、その後の日本における博物館の展示空間を形づくる際の基礎となったことにもよる。

具体的には、第一に近世と明治期の展示空間はどのような差異があるのか、また共通点があるのかを明らかにし、第二に、民衆の展示空間にたいする反応を見ていく。第三に、近代の展示空間に内在していた問題について考察する。

第一節 近世的展示空間と近代的展示空間のあいだ

近世の展示空間は、新政府の樹立にともなって、即座に姿を消したわけではなく、明治維新後約5年は、その痕跡を追いかけることができる。本節は、近世的な展示空間と近代的な展示空間のはざまにあった数年間をとりあげていくわけだが、その前に、この時期の展示空間の特質を把握するため、近世の展示空間と近代の展示空間の性質の違いを確認しておきたい。

近世における展示空間、それは、物の価値の転倒、人の貴賤・貧富の混在といった、物や人、両者の関係を既成の枠組みから解放する一面を持ち合わせていた。

その一例は仏像の見方に代表される。明治以降であれば、国の品位を示す貴重な文化財

として観察されたであろう、著名な仏師の手による仏像は、近世において誰による彫刻かという、物の客観的履歴は、たいした意味を持たない。それは祈る対象であり、願いに耳を傾けてくれる「ありがたい」存在であった。したがって、祈りの対象たる仏像を、自分たちの生活の外部からとらえること、たとえば他の彫刻との比較において仏像を冷静に見つめること、そういった見方は、ほとんど志向されていない。何代も前から祈りの対象であり、人々の願いを見つめて続けてきたという事実だけで、十分に近世の人々の心をとらえていたのである。

一方、仏像への祈りの場、すなわち寺社仏閣の堂内から、出るやいなや、祈りの対象であった仏たちは一気に人間性を帯びた可笑しみのある存在となる。寺社を維持する資金のために、わざわざ遠方から江戸や大坂など大都市部に足を運ぶ、仏像の姿は、なにやら自分たちとそう変わらない存在にうつる。仏像の姿は、貝や干物、竹など、日々、傍にある物によって作り直され、再び雑踏の賑わいのなかに展示される。このような一連の作業を通して、「ありがたい」存在であった仏像は一挙に見学者の隣にまで下りてくる。また、それを見つめる人々の社会的属性の差異もまた、展示空間内において消散する。祈りも笑いも社会的属性にとらわれない。実際、近世における展示空間は、老若男女が入り乱れる空間であった。

このような傾向は、仏像を展示した開帳の例にとどまらず、物産会をはじめとした近世の展示空間におおむね共通して指摘できる。つまり、価値の転倒が絶えず起こる場、それが近世の展示空間だったといえよう。

しかし、博物館、博覧会の創設は、いわば物の明確な位置づけ、つまり展示空間内に再び秩序を取り戻していく過程であった。物を自分たちの外側から眺めることにより、物の正確な位置づけを認識すること、このような振る舞いが明治期の展示空間に身を置いた人々にたいして要請されたのである。外側から物を見つめること、この行為によって、これまで重要視されてきた日常的な行動や思いと物との密接な関係は、切り離されることになる。結果として、物の正しい位置づけを認識するためには、外側から物を見つめるという作業、つまり自分自身の物差しではない、客観性のある物差しが必要となった。実際、外側から物を見つめること、これは、当時の日本にあって、緊急性の高い取り組みの一つであった。政府は、歴然として横たわる諸外国との国力の差の理解とそれを克服するために、国民一人ひとりの努力を訴える必要があったし、一つのまとまりを持って国家を組織するためには、自国に対する強い自負心、愛国心を形成する必要があった。

いずれにしても、比較によって物の優劣を判定し、物の価値、そしてその意味を自ら感じ取ることが見学者各々に求められていたのである。したがって、外側から物を見るという方法は、決して無秩序なままに置かれていてはならなかったのであり、見学者の自由な発想も避けねばならなかった。物の優劣を通して一つの統一体のもとに、展示空間は再び構成しなおされる。しかも、ここで言う優劣もまた、見学者個人による判断ではなしに、外部から、この場合は政府から意味で付けられた優劣であったことを忘れてはならない。このように、新たに秩序を布置しようとしていた明治政府が、近世の展示空間の性質を、これを乱す場として見なすのは当然だった。博物館・博覧会のこうした教育的意味が認識されればされるほど、近世的な展示空間は排除の対象となる¹。

以下では、近世的空間が明治にあって、どのような運命を辿ったのかを明らかにしていく。この点を明らかにすることによって、近代の博物館・博覧会が、何を排除しようとしたのが、自ずと見えてくるであろう。

さて、本節の冒頭で述べたように、明治となつてほんのわずかの間、それは4・5年たらずの短い期間ではあるが、近世の展示空間の特質を内包した展示空間は、依然として、その痕跡をとどめていた。すでにみてきたように、物産会や見世物、開帳といった展示空間は近世において大変な隆盛をきわめた。したがって、明治と年号が変わっても前時代の経験が継承されたであろうことは、容易に想像できる。事実、近世の展示空間が与えた影響は、民間主催による展示空間だけでなく、文部省主催の博覧会1871年（明治4）にも残されている。

表1は、田中芳男が1860年代（文久から慶応年間）から1870年代（明治10年頃まで）にかけて収集した薬品会・物産会・書画会・盆栽会・古器物鑑賞会の案内状や引札、出品依頼状、見世物の引札や版画などの資料をもとに作成した、民間・政府主催の展覧会（博覧会）の一覧である²。これを見ると、近世の展示空間に類似する会が明治となつてしばらく存在していたことが確認できる。たとえば、1870年（明治3）5月に開催された岸和田藩医員「薬品会」は、その好例であろう。開催の趣旨は、「右物産研究の為」「当日同志迄評論口蔵仕度」とあり、仲間との討論・評論を目的とした「資料の情報交換センター的役割」³を負っており、きわめて近世物産会の性質と似ている。

また、明治に改号する直前においても、榕室錫天による盆栽乾品物産会〔1861年（文久元年）〕や、大日本煎茶観蓮小集板橋銭蕉社中の尚古会〔1863年（文久3）〕など、近世的な特質を持つ展示空間が開催されていたことがここから分かる⁴。これらの会は、近世の展覧会と同様に2日間程度の短期の開催であったが、その間に約200～400人物見学者を迎えていることから近世と変わらぬ人気を博していたといえよう。また、会の名称の点から見ても、「物産会」、「薬品会」、「物産小集・物産小会」、「博物会」といった、近世で用いられた名称が明治期に入ってもしばらく残っている⁵。

近世の展示空間の影響がいくぶんか残るなか、1871年（明治4）、政府主催となる展覧会が初めて開催された。これまでの展示空間の多くが、ときの為政者とは無関係であったことから、この展覧会が持つ意味は大きい。ここで、政府ははじめて展示空間の意義に着目したのであり、近世的な展示空間の変革の第一歩が踏み出されたのであった。むろん、展覧会を開催した政府、とくに文部省の担当官たちの意気込みは大きく、物産会の取扱御用を命じられた田中芳男は、このときの思いを「是から殖産興業の途を開かねばならぬから、其方をやれということであった、それに付ては一つ博覧会といふやうな物を開かうといふことになりました」⁶と述懐している。

しかしながら、文部省関係者として目指すべき展覧会が、どのような物か、その姿を明確に思い描くことはできなかつたとみえる。事実、1871年（明治4）に開催された記念すべき文部省主催の展覧会は、あまりに多くの点において、近世の展示空間との類似点を有していた。たしかに、田中芳男をはじめとした数名は、海外の博物館・博覧会の経験があった。だが、日本と欧米は、あまりに前提となる条件―建物・人々の博覧会・博物館に関する知識の有無・国家としての成熟度など―が異なっている。また展覧会を主催する彼ら自身、近世の展示空間での経験から得られた情報の方が、欧米の博物館・博覧会での見聞よりはるかに上回っていた。結果的に文部省主催の展覧会は、新たな方向性と旧来の方法が入り混じる奇妙な情景を生み出す。その一例が以下に見る展覧会の趣旨と、その実際の会場の不一致である。つづけて、この展覧会の趣旨および、会場の様子を見ていくことにしよう。

まず、ここでは展覧会の趣旨である。「大学南校物産会」（大学南校は文部省の前身）と名づけられた展覧会の趣旨には、近世には見られない新たな役割が付与されていた。以下は大学南校物産会の趣旨について書かれたものである。

博覧会ノ主意ハ宇内ノ産物ヲ一場ニ蒐集シテ其名称ヲ正シ其有用ヲ弁シ或ハ博識ノ資トナシ或ハ以テ証徴ノ用ニ供シ人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ寡聞固陋ノ弊ヲ除カントスル物ニアリ然レトモ皇国從來此挙アラサルニヨリ其物品モ亦随テ豊贍ナラス故ニ今者此会ヲ創設シテ百聞ヲ一見ニ易ヘシメント欲スル（博覧会大旨 切手雛形より）⁷

「大学南校物産会」という近世以来の名称を用いながらも、その目指すところは、近世の物産会の趣旨である「討論」・「評論」から、「博識ノ資」「知見ヲ拡充」へと一変している。近世において、物の価値は仲間との議論によって、どうにでも変化した。たいてい、ここで展示された物には、はじめから「博識ノ資」・「知見ヲ拡充」するに足る価値を有している、という前提のもとにある。

なぜ、このような変化がおこるのか。その要因の一つは、展示された物が、個々人の問題関心や疑問から端を發して収集・展示された物ではなく、国家の威信をかけた物品という点に関係している。それらの物について語ることは、国について語ること、一たとえば国の美術であり、国の経済であり、国の農業—と同義であった。このように考えたとき、展示する物品についての丁寧な鑑定が必要となってくる。とくに近世の展示に多く出品されていた偽物の類は、まず最初に排除された。「物品の品位」は国の品位とイコールであり、天産物は日本の自然の豊かさを、人造物は技術の高さ、展示品に添えられる説明は学術の深さを意味する⁸。国を代表する物品が、人の好奇心のみを煽る偽物であってはならない。どうしても「品位」を保つ物品でなくてはならなかった。しかし、何が「品位」ある物品か、それを見極める力は、まだ一般の人々のなかに育っていない⁹。それゆえ、大学南校物産会では出品の依頼を一般の人々にたいしても呼びかけながらも、大学南校の職員であった伊藤圭介・田中芳男、竹本要齋の出品物および官品によって、その8割を占め、一般の人々からの出品物はほとんどなかったのである¹⁰。

このときから、展示空間の物の価値は固定化することになる。見学者は物の持つ意味を、価値の転倒を含めて議論することはなくなる。つまり、展示空間にあって見学者は沈黙を強いられるようになったのだった。

以上のような趣旨のもと物品の精査を試みた大学南校であったが、しかし、実際のところ、展示は多分に近世の影響を残した空間となっている¹¹。そもそも、開催の場所からして「近世的」であった。1871年（明治4）5月15日、「物産会」は、東京九段下にある東京招魂社（現在の靖国神社）の大祭とともに幕を開ける¹²。この日は、祭礼の初日という

こともあり、夜には花火があがり、競馬や相撲が催されるなど、展覧会場の周囲は祝祭的
雰囲気にも包まれていた¹³。

会場となった建物も平屋の瓦葺の建物で、近世の見世物に雰囲気は近い。見学者は建物
のなかからではなく、建物の外から、なかにあるガラスケースに納められた物品を見学す
るスタイルがとられている。なお、出品者である内田正雄が伊藤圭介・田中芳男に宛てた
書簡に、「鳥類者献納め品の箱の内え御入れ置被下度、ガラスの外より見え候様仕度、忝品
至而愛玩の鳥故見物の手の触れざる様堅く御取計ひ被下度奉願候」¹⁴とあることから、展
示品に手を触れることは禁じられていたようだ。また、「南校物産局より西洋其外の物産を
飾り人に看せられる。終日群集する事夥し」¹⁵と『武江年表』に記録があるように、展示
空間は変わらぬ人気を誇っていた。

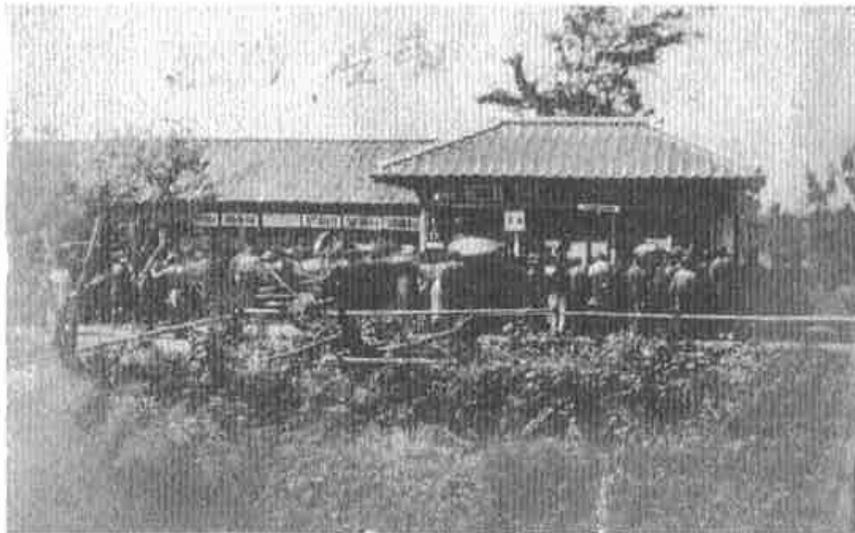


図 1 大学南校物産会の様子

[蜷川式胤『奈良之筋道』1872年（米崎清実『奈良の筋道』2005年、中央公論美術出版）より]

こうした近世とのつながりは、物の扱いにおいても見出せる。大学南校物産会では、方
言や和名の記載は少なくなっているものの、依然として正式名とは呼べない名称がそのま
ま目録に記載されているのである。たとえば隕石の俗称である「ホシクソ」や「ホシイシ」
や、琉璃の俗称「アメ石」、「イロ石」、さらに鉱石は薩摩の方言で「キバク」と記されてい
る。そのほかにも、「シロツブ石」、「ゴマ石」、「氷砂糖イシ」、「鬼ノ餅花」などあげればき
りがない¹⁶。

本来の趣旨からいえば、物を同一線上に並ばせこれを比較できるような空間を作り上げなくてはならないはずである。そしてそのために、物の同定作業、つまり方言を正して正式の名称を与える作業が必要不可欠となるはずだ。なぜなら、こうした作業をとおして、はじめて物を生活のなかの思い—たとえば物にまつわる伝説や由来など—から切り離して、客観的に物を見つめることが可能となるからである。しかし、大学南校物産会で、この作業は徹底されていなかったようだ。結果的にこの展示会場は近世の展示空間と大変近いものになっていく。

1871年(明治4)に開催された大学南校物産会は、まさしく近世と近代の展示空間のはざまにあった。しかし、こうした大学南校に見られるような近世的な性格は、ごく短い期間に淘汰されることになる。

第二節 近代的展示空間の創出

博覧会の趣旨は、「研究」・「評論」から「博識ノ資」・「知見ヲ拡充」へと変化したが、それでは展示空間はどのように創出されていったのだろうか。本節では、明治初年の民間主催の博覧会、文部省主催博覧会における展示空間の変容を明らかにしていく。

第一項 開催趣旨の変化 「研究」・「評論」から「啓蒙」・「技芸の進歩」へ

1871年(明治4)の大学南校物産会は近世的な性格を色濃く残していた。しかし、この物産会が掲げた開催趣旨、つまり一般の人々の啓蒙や技芸の進歩を目的とした開催趣旨が、広まるのにそれほど時間はかからなかった。田中芳男文庫に残されている資料によると、大学南校物産会の後、わずか半年余りの間に、「物産小集」(1871年10/7~26)、「京都博覧会」(同年10月10日~11月11日)「博物会」(同年10/20~20)、“EXHIBITION”(同年11/19~12/8)、「博物会」(1872年1月15日~会期終了日不明)、と民間人が主催する展覧会が矢継ぎ早に開催されている。これらは、会の名称こそ異なるが、開催の趣旨や、開催のスタイルは、大学南校をモデルとしていた¹⁷。

たとえば、文久年間に外国奉行を務めた竹中要齋が1871年(明治4)10月に開催した「物産小集」、灌花園標堂が開催した同年10月の「博物会」、四海屋静一が会主となって

翌年3月に開催した「物産小会」などの案内状には、「天造人工の別なく古今来珍奇異等の物件を蒐羅して衆庶の技観に供し世俗の見聞を拓め諸學術技芸の進歩を助るの一挙なり」と開催の趣旨が述べられている。これは、数ヶ月前に開催された大学南校物産会の開催の趣旨―「知見ヲ広ムル」、「世俗ノ隔見ヲ啓キ且古今ノ同異ヲ知ラシムルノ資助ト為」―とほとんど内容を一にしている。

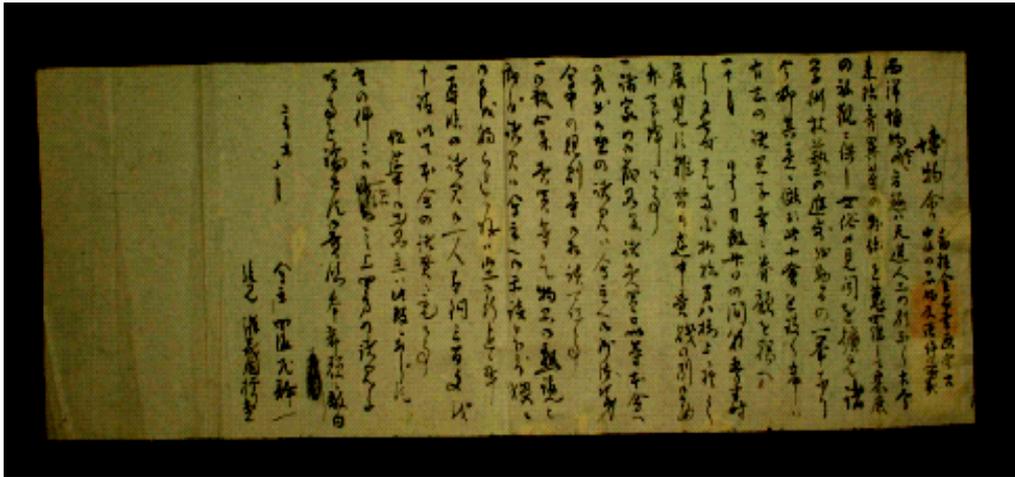


図 2 灌花園標堂主催「博物館」開催案内（1871年）

早稲田大学中央図書館所蔵

とくに、1871年（明治4）10月10日から11月11日にかけて、京都で開催された「京都博覧会」の趣旨は、大学南校物産会の趣旨を丁寧に解釈している点において際立っている。むしろ、大学南校物産会で示された趣旨を、咀嚼し直し新たに説明をくわえている、と言っても良いくらいである。三井高福、小野包賢、熊谷直孝¹⁸の三者が開催した京都博覧会発行の『博覧新報』には、次のように、その趣旨が記されている。

第一回京都博覧会 博覧会趣旨

（前略）爰ニ博覧会ノ義ヲ説ク。夫博覧トハ。縦ニ千古ノ沿革ヲ誓ヘ。横ニ萬ノ方ノ異同ヲ察シ。其覽観スル所。溥博廣大ナルヲ云。誠ニ古今ヲ縦ニ稽ルヲ云ハ。会場中ニ所有物。一二十年前ヨリ。推テ千年以上ニ遡リ。時代ニ依テ変換セシ所ニ眼ヲ着ク。古ノ迂遠粗大ナル。化シテ後ノ便利精密ニ赴キシヲ考ヘハ。則今日アル所ノ物モ。亦尚迂遠ナルヲアツテ。之ヲ便利ニ変クヘキニ夫アラン。是所所謂温而故新ナリ。（中略）廢物ハ廢物ニ付テ工夫アル物ナレハ。如何ナル物ニテモ為ニナラザル事ハナシ。是看客ノ

不同ヲ以ナリ。夫蒸気機関ハ。茶〇ノ沸騰ニ濫觴。大小銃砲ハ菓〇其元祖ナリ。試ニ看ヨ。宇宙間斯克文明ニナルタルモ。本一点ノ窮理ナラズヤ。物ニ即テ其理ヲ究メレハ。別シテ心識ヲ感動シ。才智ヲ鼓舞スル者故ニ。其功読書ニ数倍セリ。又横ニ萬方ヲ察スル事モ右ニ同ク。西洋ノ物ヲ以テ東洲ノ品ニ比シ。南国の産ヲ取テ北地ノ種に較べ見レハ。其風土ノ甲乙人民の勤情マデ知ラル、故。其善悪ヲ殷鑒トシテ。我職業ノ〇強ヲ悟リ。用捨去従ノ宜ヲ得ム。設使ハ尾張焼ハ奇麗ナレド。今日不流行ナルハ。是々仔細アリ依テ向後ハスク致シテ全備ナラム。焼方は彼地ニ学ビ。染メ付ケハ此地ヲ取ラ可ナルベシ杯。諸国ヲ照準致ス事。以会場中ナレハ。大ニ自由自在ナリ。以亦功夫ノ益多キナラズ。是ニ於職業ヲ務ル人ハ。其古今東西ヲ縦横ニ熟察シテ。新工夫ヲ用ヒ。新發明ヲ出シ。専売ノ徳ル事ヲ、心〇ヘシ。其發明品ニヨリテハ。事ノ産業ノミニテモ。終身ノ幸福ヲ保足ル事必定ナリ。又売買ヲ主トスル人モ。古今ノ消長ト東西ノ損得トヲ。縦察シ。横察シ。彼国ヘハ此品ヲ輸出セシ。彼品ハ此国ヨリ輸出シテ益アリト計算シ。龍断ノ利ヲ網スベシ。是等皆万国ノ物ヲ。輻湊セシメタル時ナラデハ出来ス。独り此会ノ専ニスル所ナリ (…後略) 19

大学南校物産会の趣旨にあった「博識ノ資」・「知見ヲ拡充」が具体的に意味するところを、ここでは詳細にわたって解説している。「夫蒸気機関ハ茶〇ノ沸騰ニ濫觴。(…注略…) 試ニ看ヨ。宇宙間斯克文明ニナルタルモ。本一点ノ窮理ナラズヤ」とあるように、西欧の蒸気機関は、高遠な理想ではなく、茶を沸騰させる原理と根本的には同じであることを説明したうえで、どれほど優れた文明であっても原理は単純であり、到達できない文明はないことを力説する。さらに、物と物を比較することにより、それを作った人々の「勤情」をも推察できるとし、単に技術の観察だけでなく、物からは、製作者さらには、生産国のいわば「品位」を理解できるとした。

そして、これらを自ずと理解できるところにこそ、読書などの教育方法とは異なる独自の展示の教育的意味があると指摘している。実際のところ、この趣旨を実現するために、すなわち、より客観的な比較を可能とするために、展示品には持ち主の名前や売り値が記され、新規発明の品や稀有な物品などについては用い方や、その原理の説明が展示に添えられていた²⁰。

たとえば 1872 年 (明治 5) に開催された第 2 回京都博覧会では、人力碓について「大小の車輪によって運転。横木を踏んで車を動かす。一人の足を以て数十臼ノ米を挽く。其

製水碓と大同小異なり。右は山村高原の水の乏き門にて便利 新發明の益アリ。新器械の世に功あり」²¹とあり、機会の原理、利用方法、利用場所など詳細に説明が加えられている。京都博覧会の一例を見ても、物から何を読み取るか、はあらかじめ方向づけられていたこと、そして、この考察に耐えうる物品のみが展示されていたことがうかがえるのである。

ここにおいて、すっかり近世の趣旨にあった「研究」・「評論」という目的は消失し、一般の人々の啓蒙、および、技芸の進歩という新たな目的にすり替わったのであった。くわえて、対象者や開催期間も、近世の薬品会や物産会のような2日程度の短期間に限られた同好者を対象としたサークル的な催しから、「世俗」「衆庶」という不特定多数の大衆がターゲットとし、20日から100日物長期間にわたる公開が一般的になる。そのほか、料金の徴収などをみても、政府主催の博覧会とこの時期の民間人による展示公開は類似点が多い。いずれにしても、最初の政府主催博覧会の目的やスタイルが、いかに短期間に基に広がっていったのかを推し知ることができるだろう。

さて、1871年（明治4）に開催された大学南校物産会は、趣旨において新たな一面を提示したものの、その実際面では近世的な性格を色濃く残していたことはすでに述べた。この新しい趣旨を徹底して実践しようとした展覧会、それが、大学南校物産会開催の翌年、1872年（明治5）に開催された「文部省博物館博覧会」²²である。前年に開催された大学南校の展覧会は、趣旨こそ近世の展覧会と性格を異にしていた物の、準備不足のためか、近世に多用された「物産会」という名称を背負っての開催であった。また、実際のところ、そう呼ぶにふさわしい内容であった。しかし、その翌年に開催された文部省博物館博覧会は、「博覧会」として、名実ともに新たな一步をふみだすことになる²³。

第二項 展示空間の変容 文部省博物館博覧会の展示空間

1872年（明治5）3月10日、東京文京区にある湯島聖堂大成殿で、文部省博物館博覧会はその幕を開けた。出品数は798点²⁴、20日間の開催期間に、2銭の入館料を支払った見学者は19万2878人におよんでいる。本項では、文部省博物館博覧会の展示空間を検討していくことにしよう。

瓦屋根を 築地壁がいかめしく整然と並ぶ昌平坂をこの日、多くの人々を登っていった。会場となった湯島聖堂は、孔子とその他の聖賢をまつた祠堂で、1690年（元禄3）に将

軍綱吉が忍ヶ岡の学問所広文館にあった聖殿を湯島に移して再建した物である。寛政の改革のとき、朱子学を正学としたのを機に、1797年（寛政9）から旗本や御家人の師弟を教育する幕府の幕府直轄の学問所となったことは、周知のとおりである。もちろん、この学問所への庶人の入学を禁じられていた。江戸川柳に「聖堂は宗旨の知れぬ手を合わせ」²⁵ とうたわれているように、近世の庶人にとって、湯島聖堂は何やらよく分からぬが尊く畏れ多い存在であったのだろう。ゆえに、昌平坂を登り、聖堂の入り口である仰高門をくぐる、ただそれだけの行為も、一般の人々にとって、非常に大きな感慨をもたらしたであろうことは想像に難くない。これまで触れることのできなかった学問の門が、庶人に向けて、かたちのうえとはいえ、はじめて開かれたのである。「衆庶ハ這盛会ノ光庇ニヨツテ大イニ見テ抔メ、自然開花ニ薫陶スベシ、之レ実ニ隆世ノ浴恩ニシテ人民ノ幸福ナラズヤ」²⁶ と東京日日新聞が記したように、博覧会は「浴恩」、つまり報いるべき義理のある恩、として見学者の胸に刻まれた。

さて、仰高門を仰ぎ見ると、そこには、見学者にむけた注意事項—下駄や傘、杖、鞭の持ち込み禁止、犬の同行禁止、草履や雪駄が汚れている場合には用意してある水拭できれいにする—が張り出されてある。掲示を横目に見ながら進んでいくと、重層な構えの入徳門にでる。入徳門をくぐれば、ついに、展覧会場である堂々たる大成殿、近世では聖堂のなかでも孔子を安置する中心的な建物が、目の前に広がる。



図 3 明治初年の湯島聖堂（『湯島聖堂と江戸時代』斯文社、1990年より）

見取り図にあるように、入徳門の先には、大成殿に向けた参道が延びている。正面奥に大成殿が左右には回廊が配置されているさまは、現在の湯島聖堂と変わらない。ただ、違うのは、祝祭的な賑わいが、このときはあったという点である。左右の回廊には、宮内省から借用したという慶事に用いる黒白幕がドレープのように優美に垂れ下がり、大成殿正面には、白幕がやはり美しくかかっていた。参道のやや端中ほどには、名古屋城から運ばれた金鯱の一对がガラスケースに収められ、展覧に供している。また、金鯱の手前には「大和吉野山産サンショウ魚」という説明札のつけられた、生きたオオサンショウウオが鉢で飼育されていた。「湯島聖堂」という近寄りがたい空間を、このとき庶人ははじめて経験する。

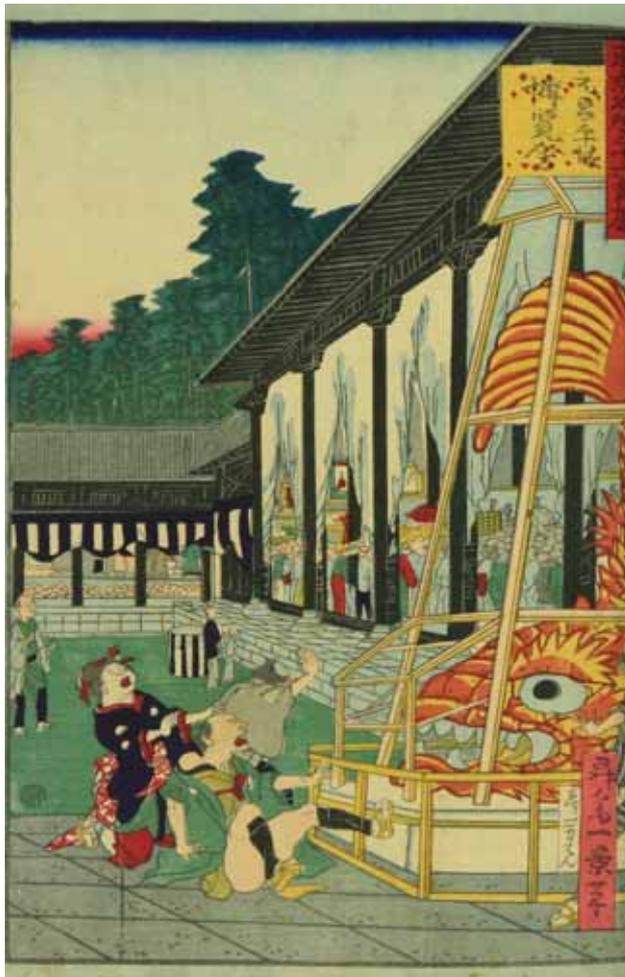


図 4 文部省主催博覧会での見学者の様子

(『東京名所三十六戯撰』 昇齋一景 画、1872 年、早稲田大学中央図書館蔵)

ところで、このときの実際の展示内容、構成はどのようなものだったのだろうか。『出品目録』および、服部誠一の『東京新繁盛記』はこのような問題を考えるうえで貴重な資料である。参考にしながら順に追っていくことにしよう。



図5 文部省主催博覧会の様子

(昇齋一景画「元昌平坂聖堂ニ於テ博覧会図」1872年、部分、早稲田大学中央図書館所蔵)

展覧会場は、左右の回廊と正面にひかえる大成殿が利用された。現在の博物館の展示空間からみると、湯島聖堂は、展示に適した空間とはとてもいえない。しかし一見、展示にそくさないこの空間を、博覧会は最大限に活用している。前回の物産会との、最も大きな違いは、展示の構成にある。「其名称ヲ正シ、其用方ヲ弁シ、人ノ知見ヲ広ムル」²⁷、「時勢ノ推遷、制度ノ沿革ヲ追徴ス」という、博覧会の目的を実現するために、このときはじめて、物品を目的にあわせて分類した丁寧な展示が組まれたのだった。たとえば、展示の動線は次のように構成されていた。

まず、展示が始まる前に、一服部誠之は「前室」と表現している—「鳳輦」と呼ばれる、儀式の際の天皇の乗り物が配置されている。この輦は、屋根のうえに金銅の鳳凰、表面は黒い漆に金の飾り、紫の幕と翠の御簾といった、色鮮やかな大変美しい物であったようだ。

具体的な展示が始まるそのまえに、天皇に関連した物品を配置したこと、またそれが非常に美しい意匠をこらしたものであった、ということは、決して偶然ではない。これから大量の展示品を見学する人々の意識に「天皇」や「日本」、日本の「文化」を強く印象づけること、ここにこそ目的があったと思われる。日本の後進性を目の当たりにしても変わらず自尊心を保つこと、そして何よりこれから先の展示を見学するにあたり、つねに「日本」を意識しながら見ること、このようなねらいが、展示構成からはうかがえる。その入り口には、大きな地球儀が置かれた。美しい日本の文化の姿、その一例を、目に焼き付けたあと、地球の地形が示され、日本が具体的にどこに位置するのか、他国の位置などを、客観的に把握する仕組みとなっていた。世界の全体像を理解したうえで、各国の産物、日本の産物や文化を紹介しようという趣旨である。

展示構成は、第一に古物、第二に兵器や茶器、楽器など、第三に国内各地の産物、第四に動物、第五に西欧の物品という並びになっている。以下ではそれぞれの展示室の様子を見ていくことにしよう。

第一室には、いわゆる「古物」の部屋であり、第一に古墳や遺跡からの出土品、第二に天皇家縁の物品が展示されていた。前者についてみると、古銭や古鏡、平城京から出土した鉄瓶や古瓦などが含まれ、たとえば古瓦には「内裏」や「足利学校」、「野州国分寺」、「舍利寺」、「安国殿」「後醍醐天皇城瓦」、「多賀城瓦」など多様な時代、場所の瓦が同列上に並べられていたようである。後者には、天皇即位の正服や大嘗祭の祭衣、金の冠、長鳥帽子、女官の服、十二単衣、なかには源平の合戦で8歳の幼さで命を絶った「安徳天皇御産切レ」や、後醍醐天皇の皇子で足利尊氏に倒された尊良親王による「朗詠集」などが含まれている²⁸。これらはさして

注意を払って選ばれた物品には見えないが、いずれも誇りある日本の歴史を提示したい、という主催者側の意思に貫かれている。事実、「古物」に関する資料室とはいっても、石斧や土器片といった雑多な日常雑器は展示品から除外されており、鏡や瓦、古銭など、日本の技術や文化の精華に相当する物品が選択されている。また、天皇家に関連する展示品のなかに武士に地位を追われ不遇なままに亡くなった安徳天皇や尊良親王の所持品が含まれている点も、天皇による支配体系の正当性を意識したゆえんであろう。

第二室は、古兵器、茶器、楽器に関する展示室で、太刀、鎧、銅矛、槍や茶碗、琴、三味線などがこれに含まれる。展示品のなかには、加藤清正の槍、豊臣秀吉の面、源義経の

袴、千利休の杓子など、歴史上の人物の所持品も多く含まれており、見学者の好奇心を喚起したようである²⁹。

国内の産物が一堂に会するのが第三室である。各地の染物、織物、陶器、銅器、漆器、鉄器といった工芸品や、農具工具など実用品、果物や穀類、木材鋳物など天産品や特産品が勢ぞろいする。物品ごとに全国の品々が一面に展示されているため、見学者はそれぞれの地方の風土や技術を自ずと比較することになる。たとえば山城のちりめん、薩摩の藍染め、甲州縞、結城紬、越後のちぢみ、玉川の絞り染めなどは同じ空間内に「ずらりと並べられる」。なお、第一室で排除された日常的に使用したであろう農具や工具もこの場に「陸続交錯して一室に雑居」³⁰していた。

第四室は動物に関連する物品が収集されている。狼、猫、鷹、イノシシ、コウモリ、カマキリ、トンボやマツムシ、ミミズなどに親しみ深い動物や昆虫のほか、鳳凰や鯨の骸骨や髭、オットセイの髑髏、人骨もここに含まれていた。

最後の展示室には西欧諸国から輸入された物品が揃う。その大部分は前年に開催されたオーストリアで開催された万国博覧会から持ち帰った物品で、金銀製品、蝨石の肖像、各国の軍服などの衣類や、活版や紡績の機械、時計、イギリスの国会の図など多岐にわたる。長く鎖国下の日本で暮らしていた見学者は、最後の展示室を通して諸外国の存在に気付くと同時に、他国の技術力の高さを目の当たりにするところになった。服部誠之は、「一瞬に千紙を摺る可く」印刷機、「双手に百糸を繰るに堪ゆ」³¹紡績機を、感嘆の眼差しで見つめている。国内の文化や歴史、技術力を把握したその最後に、今後に向けて日本国民が考えていくべき方向性が示されるところで展示は終了する。

それでは、「その他の品物、雲集星列、その数算すべからず、座して全世界を覗ひ、指して万像物を観る」³²、と記された博覧会は、19万にもおよんだ見学者に、いったいどのような思いを抱かせたのだろうか。ここで重要となってくるのは、近世と異なる物の見方が新たに誕生したという点である。

たとえば博覧会を見学した服部誠之は次のように述べている。「それ博覧其れ博覧、全備の品は固と博覧し、不具の物も亦博覧、吾が輩愚物の如きも、亦博覧会中の一物なり」³³。私たちはここに、近世の物の見方に変わる、新たな物の見方を確認することができる。「吾が輩愚物の如きも、亦博覧会中の一物なり」という発言には、日本国と同一化している服部の「吾」がある。多角的に日本の文物、動植鋳物、歴史をとりあげた博覧会のなかで、見学者は、日本に居住する自分もまた日本に属する生物であり、同時に自分自身もまた展

示品になりうる存在であることを認識していた。こうした傾向は服部だけに限らず、いくつかの見学者の感想からも確認することができる。「温故知新以テ師タル可シ往来豈ニ昔ヲ与ニ詩ヲ言三千世界無量ノ物一々人照メ怪又奇」³⁴、「けふひと日富たる夢をみつる哉綾よにしきよ玉よこか年よ（ルビは著者による）」³⁵とあるように、温故知新の意味、進歩への情が読まれているケースは少なくない。なかには「まのあたりみておこたりをくゆる哉いにしへその人のユミを」と、日々の自分の振る舞いを戒める内容の物をみられる。

前節で触れたように、当時の日本は「国際列強に対する日本の『独立』の追及」³⁶という目的のもとに、博覧会・博物館政策が推進していったわけだが、そこで期待したことは国民が「日本国民」であることを意識すること、それも世界との比較において意識するところにあった。その点からいえば、展示空間の教育は大きな効果をあげたといえる。自分自身をひとつの展示物のようにとらえ客観視すること、さらに世界のなかの小さな一つの存在であることの自覚を、展示空間は見学者にたいしてうながしたのである。しかも、自らを展示品と見なした見学者は「泥に流がれ糞に流がれ、固と観る可き物無」³⁷ い一本の鋤などから、人間の生命、さらには「瑞穂の国」が生じていることを読み取り、金鉦、銀鉦、錫、鉄など石が強兵を養うこと、さらに「政府」を保つ礎となることを理解する。

「国家の盛衰畢竟這の耒耜（鋤のこと）に在り」³⁸ と服部の述べるように、展示空間は、時系列による展示を通して、小さな努力が確実に実りをもたらすことを、見学者に無理なく教育することを可能としたのだった。「立国は私なり。公に非ざるなり」³⁹という言葉にあるように、「私的」な責任や「私的」な信義を守る態度が、国家を形成していくに際して、ひととき重要であった時代にあつて。自尊心の発揮と「哀勢」「廢之」の逆境にある自国の弱小性についての厳しい認識を見学者に喚起した展示空間は、すぐれて教育的な施設だったといえよう。

しかし、ここで忘れてはならないのは、物をはかる基準が、自分自身ではなく、外部にあったということ、さらに一つの明確な方向性を持っていたという点である。展示品の価値は、各地方や西欧との比較によって、はじめてあらわれてくるのであり、比較するときの視点も「進歩」や「富国」といった方向性がすでに決定づけられていた。それゆえに見学者は、物を見つめ、さらに一つの体系のなかにしっかりと位置づけるという作業を無理なく行う。

こうして、近世の展示空間にみられた体系や秩序といった物が想定されない形態、だが、それぞれの経験や感覚、理解などを踏まえて討論を通して物の価値を決定していこうとす

る試みは、姿を消していく。物を自分の外から見つめ、体系のなかに位置づける、経験なり知識なり情報を一つの名称のなかに集約わせていくこと、その精神の働きのための訓練の場として明治初期の展示空間は機能していったのである。

こうして見学者にとって開かれた対象ではなくなった展示空間は、彼らの目に「恩恵」として映るようになっていったのだった。「開闢以来の国の宝」という感想があるように、展示空間は「国の宝」として理解されるようになる。すなわち、見学者自身も、もはや展示空間を自由な語らいの場、語らいを通して自らが作り上げていく場としてではなく、すでに完成した観念を受容する恩恵的な場として知覚するにいたったのだった⁴⁰。

これまでも先行研究で多く指摘されてきたように「江戸以来の見世物との連続性を保ち続けたからこそ、博覧会は、明治の民衆に早くから比較的容易に受容された」⁴¹というのは事実である。しかし、そこに存在する決定的な違いを見逃してはならないだろう。

第三節 展示空間における娯楽と教育の齟齬

一見すると、展示空間の教育性を見出し、これを一般の人々を啓蒙していこうとする政府の試みは成功したかのように見える。しかし、明治中ごろから後半にかけて、展示空間の教育は新たな課題に直面する。つまり展示空間の教育色が次第に色あせ、代わって娯楽の比重が大きなものになっていくのである。これは、明治期に限らず、現代の博物館にも共通して指摘できる課題であり、展示空間の教育性を考えるうえで、根源的な問いを投げかけている⁴²。なぜ、展示空間から教育性が抜け落ちていったのか。また展示空間と娯楽のかくも密接な関係は何に起因するのだろうか。

この問いに応えるには、たんに明治以降の展示空間の変質を把握するだけではなく、近世との連続をもって考察していく必要がある。すでに第一章、第二章で触れたように、展示空間と娯楽、悪所との結びつきは、展示空間の誕生より決定づけられていたのであり、展示空間の特質の一つといってもよい。だが、なぜこの時期に、展示空間の娯楽が大きな問題として浮上してきたのか。この問題の要因を、前時代との比較によって、つまり近世の展示空間と何が異なり、また何が変化しなかったのか、を明らかにすることによって迫っていかなくてはならない。

繰り返しになるが、展示空間と娯楽の結びつきは近世より確認できる。近世における展

示空間の多くは、為政者にとって悪所といわれる盛り場を中心に展開されてきた。また、実際、展示空間における言論、活動も、社会制度、政治、経済に対する批判や問いが投げかけられるなど、為政者が「悪所」と呼ぶに相応しい空間だった。くわえて、展示空間の展示品の価値は、既成の価値観や秩序から解放され、つねに揺らぎをはらんで流動していたのであり、見学者自身が他者との対話を通して、物の持つ価値や意味をつくりだしていく。

このように、社会的秩序や物の位置づけなどが動的な状態にあるからこそ、一般の人々は、日常のしがらみや、やるかたない思いを悪所において発散することができたのである。そして、このダイナミックなプロセスが、近世の人々に娯楽として認識されていたのだった。したがって、娯楽と、社会秩序の固定と停滞を逸脱し揺り動かそうとする場、の両者は近世において常に連動していたのであり、このつながりこそが展示空間の特質でもあったのである。

しかし、明治以降、社会秩序の固定と停滞を逸脱し揺り動かそうとする場としての機能は、展示空間から完全に抜け落ちていく。これまで述べてきたように、明治期の展示空間には、明確な価値体系が貫かれていた。もはや見学者は物の価値を議論のなかで見出したりはしない。展示されている物は、動かしがたい価値と意味を所有しているがゆえに、展示品となっているのであり、あとは見学者が、その価値や意味を読み解くところに教育的な意味がある。

こうした変化の結果、近世からの連続で見たとき、娯楽の側面のみが、展示空間の特質として残されることになった。近世において、老若男女、さまざまな階層が入り乱れる悪所という空間、物を通して、今ある秩序を問い返し、新たな考え方を構築していく場、このような空間での過ごした方を含めて娯楽と考えたのであれば、明治以降の娯楽が、おのずと変質していくことは避けられないだろう。展示空間の娯楽としての特質は残っていても、その質は大きく変化していく。つまり、悪所の「悪」が抜け落ち、「笑い興じてたのしむ、悦楽」という文字通りの娯楽空間となっていったのである。

それでは、いったい明治期の展示空間の娯楽はどのように変化したのだろうか。この点を明らかにするために、近世の展示空間との共通点と相違点を細かく追っていこう。

まず、近世と明治以降の展示空間の共通していた部分—展示空間が、悪所と呼ばれる場所に立地しつづけた、という点—について考えてみよう。近世の展示空間が浅草や上野近辺などの盛り場を中心に展開されたことは、これまでみてきたとおりだが、明治以降の展

示空間もまた、こうした場に位置しつづけた。本節では、明治期またそれ以降も、国家規模の博覧会や博物館が開催または開館しつづけて、現在も東京国立博物館、国立科学博物館、東京都美術館、上野動物園、東京文化会館、国立西洋美術館など展示空間が集中している上野公園の性格を取り上げながら考察をすすめていく。

開催年	博覧会	開催地	入場者数(千人)	開催期間(月)	出品者数(千人)
1877(明治10)	第1回内国勸業博覧会	東京・上野公園	454	3.3	16
1881(明治14)	第2回内国勸業博覧会	東京・上野公園	822	4	28
1890(明治28)	第3回内国勸業博覧会	東京・上野公園	1024	4	77
1895(明治23)	第4回内国勸業博覧会	京都・岡崎	1137	4	74
1903(明治36)	第5回内国勸業博覧会	大阪・天王寺	4351	5	118

表2 内国勸業博覧会の開催地および入場者人数

上野公園では、1877年(明治10)8月に教育博物館として開館したのを皮切りに、第1回(1877)、第2回(1881)、第3回(1890)内国勸業博覧会が開催され、その後も、東京勸業博覧会(1907)、東京大正博覧会(1914)、平和記念東京博覧会(1922)、と国家規模の展示空間が創出されつづけて、現在の公園の原型をかたちづくるにいたっている。上野公園が展示空間の場として期待された要因や、その空間的な広がりの特質は、この問題を考えるうえで、貴重な情報を提供してくれるはずである。

上野の山〔上野公園〕が博物館や博覧会の会場の候補となったのは、それまでの博物館の敷地があまりに狭くなったこと、人家と適度な距離を保っていることが、主な要因であったが、はからずも、上野の山自体が従来からもっている土地の性格が、展示空間の性格に影響を及ぼすこととなる。

ところで上野の山が近世より持つ性格とはなにか。それは、「悪所」としての性格である。現在でも上野公園の雰囲気は、文教地区としてのたまたまに集約されることのない、賑やかさ、雑居感が内包されているが、それは上野公園が近世よりアジュールとでも言うべき性格の場所であったことに起因している。上野公園はもともと、徳川将軍家の菩提所を有する寛永寺のある聖地であると同時に、浅草と並ぶ繁華街で、旅館や料理店などが数多く立ち並ぶ盛り場だった。桜のころになると、現在とかわらず、大変な賑わいを見せる。紀州藩の侍医であった原田某は、『江戸自慢』のなかで、「花の比は、今日は、飛鳥山、明日は上野、翌日は向島、日暮里と、日に浮かれて出て、或いは三味を引舞をまい、興酣に狂い戻れど、行厨は至極質素にて、多くは掻くませ鮓⁴³又は粗物の煮⁴⁴等なり」⁴⁴と、質素な酒のつまみと片手に、飛鳥山、向島、日暮里、そして上野の桜を、愛で歩くさまを記し

ている。上野の山は、聖地でありながらも、背筋を伸ばして時を過ごすような堅苦しい場所ではない。上野の門前には、水茶屋と呼ばれる湯茶にくわえて酒肴を販売する小屋掛けの店が多く立ち並び、店内では、20歳に満たない若くて美しい女性が接客をすることで、人気を博していた。

上野の山のこうした性格は、明治になっても変わらず、引き継がれる。明治維新からわずか1年、1869年（明治2）2月14日に上野参詣・花見が政府によって許可されるやいなや、都市部を中心とした人々がかけつけ、そのさまは『武江年表』に「日毎に遊観多し」⁴⁵と記録されている。「花に浮かれ」「自由の遊」ぶ、人々の姿を鮮やかに『東京新繁盛』は以下のように描く。

山に笑い声が響き、花の間で酒池肉林の宴会が繰り広げられる。（…）弁当を開く者、ヒョウタンから酒を飲む者、一人酔って楽しむ者もあれば、仲間と騒ぐ者、立ち上がって歌う者、座って口笛を吹く者もいる。各々好き放題だ。歌が終わればすぐ踊り、また歌って踊り、猫も歌えば杓子も踊る。花に浮かれない者はない。浮かれるといっても人それぞれ。威張る者あり、自慢する者、おかしがる者、愚痴をこぼす者、さまざまな浮かれ者がいる。

虎ひげをひねって、あご長く、傲慢で自分の身分をひけらかしている者は、山の手の大将か下町の隊長さんだ。（…）お腰元に支えられて、楊貴妃を気取る奥様もいる。おそらく、これはじゃじゃ馬が一夜にして「奥様」になった者だろう。栄えてはいるが、憐れみずにはいられない。哀れにも、この世の栄えに浮かれて、わが身の衰えやすいことを忘れていらっしやる。（…）一群の書生は、木綿の衣は破れ、小倉袴は裂け、下駄は欠けて、財布に金はない。それでも自ら称する。「僕は天下の大天才、わが衣ほつれるとも、わが腹に垢なし」生半可な横文字を吐き、意気揚々として花の間を歩く。その目は芸妓と戯れ、女にお酌をしてもらう者をにらみつけるようだが、心臓から三寸下がったへそ下では、燃えるように嫉妬し、酔っ払いのように涎を流しているだ。ところが、連中は知らないようだが、美人は彼らの不潔を笑っている。（…）

自由の身で、自由の山に遊び、自由の花を観て、自由の楽しみを尽くす。これこそ自由世界ではないか。自由の遊びの後には、自由の酔いが来る⁴⁶

上野は、この世の栄えに浮かれてわが身の衰えやすいことを忘れて、楊貴妃を気取る奥

様に憐憫の情をもよおしたり、英語を口にする書生の俗っぽさを笑うことが許される、まさに「自由世界」だった。

こうした場所に展示空間が配置された背景には、土地の広さや防災上の理由（火事が起きた際に、池から水を吸引することが可能）もあっただろうが、同時に、展示空間が一般の人々に対する教化を目的としていること、そのために、一定数の集客を期待しなくてはならないこと、こういった条件も影響していたと考えられる。そして、実際のところ政府もすすんで、上野公園内に遊樂的な仕掛けを導入していたのだ。たとえば、正面の美術館に向かう表門までの通りの一角には、「博覧会場附属売店」が、政府によって、わざわざ計画されていし⁴⁷、記念すべき第1回目の内国勸業博覧会では、美術館⁴⁸を中心に対称型の展示館を配置し、その中央には噴水を持つ西洋風の庭園が作りだされている（図7）。



図6 第5回内国勸業博覧会 教育館の写真

（『東洋画報』第1巻第1号、敬業社、1903年3月より）

しかし、博覧会場外に売店を設置することを許可したとはいえ、花見に見られるような小屋掛けのごとき店構えであっては、内国勸業博覧会の威信を汚す。遊樂的な施設を認めながらも、博覧会全体のイメージを崩さぬよう苦心する政府の胸のうちの、以下の『明治十年内国勸業博覧会規則帖』から、うかがい知ることができる。

茲に売店を取建つることを許し其店中にて場上市に列し物と同じ品物を売らしめ衆人の便

利を図る（…中略…）

第一条 場上に列し物と同じ品柄の物数個ありて直に売捌んと思ふ者は博覧会外公園にて一区の地を無税貸与ふべし。

第二条 売店なりとも本局官員の差図を受け見苦しからざる様建築すべし。

第三条 建築其他売店に拘る一切の入用は自費なるべし。（…中略…）

第六条 売店を取建んと思ふ者は所用の地坪家作等を取調べ絵図を添て（…中略…）申出べし⁴⁹

「見苦しからざる」建物をもって販売するようにと指示が出された物の、実際に出展された店は、食品や日用品、雑貨類、さらに全国各地の名産品を扱う物が大部分で、その様はあたかも縁日のような賑わいを呈したのだった⁵⁰。政府の見通しどおりになったかどうかはともかく、政府が展示空間内に、近世と変わらぬ「開帳・出開帳と同じ原理」⁵¹を採用しようとしたことは間違いない。



図7 第2回内国勸業博覧会会場図;門の外に店が立ち並んでいる様子が右下に描かれている。

（守川周重画「上野公園地第二回内国勸業博覧会一覽図」1881年、早稲田大学中央図書館所蔵）

また、出品物についても博覧会開催の目的を強調し、これと合致しない出品を受け取ら

ない旨を記した文書を配布するなどして、徹底した管理のもとに選択されていたことは、すでに述べたとおりである。見学者にたいしても、内国勸業博覧会が骨董品や珍奇物が中心の見世物的催しと一線を画することを繰り返し注意する⁵²。内国勸業博覧会のたびに配布された案内書からは、政府が博覧会の趣旨を見学者に周知させようと必死に取り組む様子がよくあらわれている。

観者注意

内国勸業博覧会の本旨たる工芸を助け物産貿易の利源を開かしむるにあり徒に戯玩の場を設けて遊覧の具となすにあらざるなり。博覧会の効益を約言せば跋涉の勞なく輒く一も場に就て全国の万品を周覽して以て其優劣異同を判別すべくまた各人工芸上の実験と其妙処とを併せて一時に領収する是なり。(…)斯の如く仔細に觀察し来らば、凡そ万象の眼に触る皆知識を長するの媒となり一物の前に横たはる悉く見聞を広むるの具たらざるなし⁵³

(強調は筆者による)

新たに創設された展示空間は、それまでと異なり、「戯玩の場を設けて遊覧の具」ではない。「觀察」を主眼とした、教育空間であることが、内国勸業博覧会のたびに繰り返し喧伝され続けたのだった。

しかし、このことによって、展示空間の娯乐的側面は、決定的な変化を遂げる。近世における展示空間には、階層や男女、さまざまな立場が混在する悪所において、既成の秩序や見方を一度、ひっくり返すところに、その愉しみがあつた。だが、新たにつくりだされた空間は、「觀察」すべき大枠が提示されており、この部分に関して見学者は受動的にならざるをえない。繰り返し述べているように、展示空間を通して明らかにしようとする内容は、すでに決定済みなのであり、一般の人々がこの部分にアクセスすることはできないのである。見学者は枠組みのなかで、個々の物がどの箇所位置づくのかを考察するにとどまる。近世における娯楽と、社会秩序の固定と停滞を逸脱し揺り動かそうとする場、この両者の有機的なつながりが断ち切られたとき「娯楽性だけが、展示空間に残されることになった。しかし、政府が提示しようとする大きな枠組みの理解すなわち教育と娯楽の共存は難しく、両者の齟齬は、明治中ごろから次第に大きく広がり始める。そもそも堅苦しさと言論空間は両立しえないのだ。近世と近代の展示空間の大きな違いがここにある。

展示空間の娯楽と教育の両者を結びつけようとする試みは、明治期を通した大きな課題であったが、これが成功することはなかった。展示空間そのものは、一回の企画で100万人以上を集客する当時としても特筆に価する大ブームを起こすものの⁵⁴ (表2)、次第に、その内容は娯楽に偏るようになってくる。吉見俊哉は「積極的に見世物的な要素を会場のなかに取り入れていこう」⁵⁵とする動きと指摘しているところだが、しかし見世物的な要素と類似していても、その内実は、近世と大きな変化があったことを忘れてはならない。

1903年(明治35)に大阪、天王寺今宮で開催された第五回内国勸業博覧会では、ついに積極的に遊戯施設が採り入れられるようになる⁵⁶。「木馬に跨がり、愉快に回転する機械」、現代でいうところのメリーゴーランドや、「乗客を小艇に乗せて、高さ四フィートの台上より、長さ三百十四尺の斜面の軌道を走らせて、地中に墜せば、艇は乱波飛沫の間に没して、暫時、その形を失ふ」という乗り物—これは現在も遊園地などによくあるウォーターライダーのようなアトラクションであろう—、「油絵にて遠景を描き、前景には人物、樹木、家屋、船舶等の絵画様を配置し、人物、船、水流等を時々動かして観覧客の眼を悦ばしむ」⁵⁷世界1周館など、展示空間は一大レジャー施設の装いを帯びはじめる。夜間には各パビリオンがライトアップされ、博覧会協賛会京都支部及び京都市臨時勸業委員会等の勧誘により西京祇園新地の都踊が博覧会期間に合わせて興行する⁵⁸。

夏目漱石はこのような博覧会の状況について、『虞美人草』のなかで、「文明の民程自己の活動を誇る物なく、文明の民程自己の停滞に苦しむ物はない。文明は人の神経を髮剃で削って、人の精神を搦木^{すりこぎ}と鈍くする。刺激に麻痺して、しかも刺激に渴く物は数を尽して新しき博覧会に集まる」、「文明に麻痺したる文明の民は、あっと驚く時、はじめていきているなど気が付く」⁵⁹と記し、見学者が博覧会にひきつけられるのは、精神的な活動への希求ではなしに、むしろ精神を鈍らせ、素朴な「驚き」のなかに、生きている実感を求めていると解釈している。「博識ノ資」・「知見ヲ拡充」を目指した明治期の展示空間の教育は、結果的に、既知の枠組みに新たな知識を追加する、という面においてのみ、教育的な働きをするようになったのだった。

小括

強制的に導入された学校教育制度と異なり、展示空間の制度化への過程は、穏やかに、抵抗もなく都市部を中心とした人々に受け入れられていった。このような受容過程ゆえに、

先行研究において博物館や博覧会は、学校教育とは性質の異なる教育機関として肯定的にとらえられてきたきらいがあった。

しかし学校教育が、民俗学者の宮本常一が指摘したように「物の理をといて不合理な物を排除して知識をふかめてゆく」⁶⁰教育であるとするなら、明治期以降の博物館、博覧会の教育は、学校教育と非常に近い関係にある。「学校教育その物の中に、日常生活の機微について教えることはなかった。それらは依然として村里生活の中にあつたといつていい」⁶¹と宮本が指摘しているとおりに、近代学校教育の内容は、客観的な事実であり、それはいわば外部から与えられた物であつた。同様に、客観的に自分や国家を見つめること、この点が博物館や博覧会にとって、重要な意味を持っていたことは、本章で述べたとおりである。

こうした近代に形づくられた展示空間の性格は、近世における展示空間とあざやかな対照をなしている。近世における展示空間は、物の間に、また物の解釈に際して、「善悪」「貧富」などといった区分を設けておらず、無秩序でとらえどころがない。しかしだからこそ、物の価値や意味を見学者自身が決定することができた。それは同時に、物と物、人と人との関係を流動的なもとへと変化させている。正しいかどうか、にとらわれることなく、思いのままに疑問を口にし、議論できる近世の展示空間の背景には、こうした特徴が確認できる。

だが、明治以降、展示空間の自由な思想の回路は閉ざされ、一つの道筋に従うようになる。物を自分の外部から眺め、一つの統一体のなかにしっかりと位置づけること、展示空間は、その精神の働きのための訓練の場となつたのである。この点において学校と博物館の両者は接近する。博物館、博覧会における教育もまた、混沌のなかにあつて言葉を紡いでいく作業ではなく、秩序と体系を保持したままに構成されていったのである。

しかし、そう考えると物をとおした教育の独自性とはいつたい何にあるのだろうか。博物館、博覧会は、方法が異なるものの、その教育的意味について言えば、学校教育と、大きな相違はなかつた、そういつても言いすぎではない。大正期以降、博物館や博覧会の教育の曖昧さは、博物館関係者を悩ませることになる。しかし、この点については次章で述べることにしよう。

第五章

¹ 近世において、為政者によって見世物の禁止令が出されることはあったものの、その政策に一貫性はほとんどなかった。『見世物の歴史』（古河三樹、雄山閣出版、1970）によると、近世における見世物の取り締まりは次の通りである。寛永・正保の頃、蹴鞠を用いた見世物が禁止となった。本来、公家の欠くことのできない素養の一つである蹴鞠を卑賤の町人に見せたとして禁止となる。また1687年（貞享4）、5代将軍徳川綱吉が出した生類憐みの令のともない、珍獣に関する見世物が取り締まりの対象となる。その後も幕府禁止の金入りの華美な衣装を身につけた咎で女軽業や、幻術、人馬に関する見世物が弾圧された。新奇なものが登場すると、為政者による取締りが入るのが常で、基本的に見世物興行は自由であった。

また明治に入って、最初に禁止されたのは1868年の性的見世物であった。「西京東京ハ皇国ニシテ教化ノ根元ニ候ヘハ仮初ニモ非礼非義ノ状態有之候テハ其弊普ク御国内ニ及候事故」との布告が出され、皇国の首府において「非礼非義」の働きは教化上、良からざる結果を招くとして、はやくも取締りの対象となる。その後も矢継ぎ早に贋造物の出品（1871年）や不具者見世物（1874年）の禁止が打ち出されている。

² これらの資料はアルバムにそのままに貼り付けられている。年度など若干の補足説明はあるものの概ね当時のまま状態の保存である。内容は、先行研究においても「博物館学関連資料は現存するもっとも重要な資料体」（西野嘉章・根本亮子『学問のアルケオロジー』東京大学、1997年）であることが指摘されてきた。とくに、明治初期の博覧会に関する資料は充実し、幕末から明治初期に開催された薬品会、物産会、博覧会の資料に加え、田中が直接に関わった1871年の「大学南校主催九段物産会」、1872年の「文部省主催湯島聖堂博覧会」、1873年と1874年の「博覧会事務局主催博覧会」等に関する資料、さらに「京都博覧会」の際に刊行された『博覧新報』（第1号—第8号）などを含んでいる。

³ 上田穰「“ルーツ・日本の博物館”展の企画と構成」『博物館研究』第15巻第4号、p.5。

⁴ これらについても、やはり「名称不分□□当日諸友と評定し」「古物を賞玩するハ希世無比乃故のみにあらず 真を徴し贋を弁し審定考□精覈ならんことを欲す」「展観討論し聊かも面従後言ならん事を希ふ」と開催の趣旨がまとめられており、「評定」「評論」「研究」に主たる目的があった。

⁵ なお、これらの名称は1872年に文部省博物館が「博覧会」と銘打った展覧会を開催されたのち、次第に減少する。

⁶ 東京国立博物館『東京国立博物館百年史』、第一法規出版、1973年。

⁷ 博覧会大旨 切手雛形（田中芳男『博物貼』、東京総合図書館田中芳男文庫蔵）。

⁸ 「各地方物品差出方」布告（1872年1月14日）、同前。

⁹ 小田県（現在の岡山県笠岡市）では1873年5月に県主催の展覧会が開催された。その際、各小区（村）に回覧された布告には、以下の意味の文書が残されている。「出品物が少いのは戸長・副戸長が斡旋の努力をしなかったことになり、多いのは斡旋が行き届き、開化の村と誉められることになる。一層力をふくされたい。珍しい器物を出品のために見付け出すこと（見分け）はそれ自身で知識を修得することになるから、老若男女・下男下女に至るまで出品に努められたい」。ここからは、出品物の収集過程を通して、モノの価値を見極める力を養成しようとする試みがうかがえる。（真壁忠彦「明治初期に中国地方小田県で開催された展覧会」『博物館学雑誌』第24巻第2号、1999年3月、pp.91～97）

¹⁰ 伊藤圭介1197品、田中芳男835品、官品559品、竹本567品、以上で出品物の約8割を占めている。（東京文化財研究所美術部 編、『明治期府県博覧会出品目録：明治4年～9年』、東京文化財研究所、2004年）

¹¹ なお「博覧会」として開催する予定だった計画の当初は、壮大な博覧会場を想定していた。

8角形の三階建て(菊の紋を意匠)で出入り口や窓はガラスで光が差し込む設計となっており、パリの万国博覧会を想起させるつくりである。前掲、『国立東京博物館百年史』pp.30-31に詳しい。

¹² 東京招魂社は1869年6月に創建されたばかりだった。なお旧幕府の西洋医学薬草園がこれに隣接している。

¹³ 齊藤月岑『武江年表』1882年、(今井金吾校訂『定本武江年表』下巻、筑摩書房、2004年、p.236)。

¹⁴ 内田正雄、伊藤圭介・田中芳男宛 書簡(1871年5月14日)、前掲、『博物帖』。

¹⁵ 前掲、『武江年表』(『定本武江年表』下巻、p.235)。

¹⁶ 前掲、『明治期府県博覧会出品目録：明治4年-9年』、東京文化財研究所、2004年。

¹⁷ 前掲、『博物帖』。

¹⁸ 三井高福は京都の豪商であった三井家の跡取りであり、のちに三井銀行や三井物産等を創立した人物である。熊谷直孝は京都の御幸町に設けた種痘所を引継ぎ、また種痘所の一部を改造して寺子屋を開いたり、1869年には、柳池小学校の母体となる学校を開設するなど教育に関与している。なお、翌年の第2回京都博覧会では、博覧会社を設立し、会社による運営へと切り替えられた。

¹⁹ 第1回京都博覧会「博覧会趣旨」、前掲、『博物帖』。

²⁰ 同前。

²¹ 『博覧新報』第2号、2丁裏。(同前、『博物帖』)。

²² 博覧会開催に携わった文部省少史、蜷川式胤は博物局が博覧館となった経緯について次のように述べる。「大成殿を以而局名の博物局と唱へ候ハ不都合ニ付、博物館と改る」〔蜷川式胤『奈良之筋道』、明治5年2月17日の記録より(『奈良の筋道』中央公論美術出版、2005年、p.4)。

²³ 文部省博物館博覧会開催は前年に開催された大学南校物産会とほぼ同義であった。1872年1月の文部省布達には、「博覧会ノ旨趣ハ、天造人工ノ別ナク、宇内ノ産物ヲ蒐集シテ、其名ヲ正シ、其用方ヲ弁シ、人ノ知見ヲ広ムルニ在リ、就中古器舊物ニ至テハ、時勢ノ推遷、制度ノ沿革ヲ追徴ス可キ要物ナルニ因リ、嚮者御布告ノ意ニ原キ、周ク之ヲ羅列シテ世人ノ放観ニ供セント欲ス」とある。新たに古器旧物について加筆された以外は前年度の物産会と同じである。ただ古器旧物について、新たに付記している点のみが異なっている。これは、大学南校物産会から2ヶ月後の1871年5月23日に、太政官より古器旧物保存の布告が発せられたこと、「本朝風」つまり「日本らしさ」の理解を最重要課題とし、歴史博物館の建設に尽力した町田久成の意見の影響が考えられる。

²⁴ 『明治5年博覧会出品目録草稿』(前掲、『明治期府県博覧会出品目録』pp.46-60)。

²⁵ 三省堂編修所 編、『江戸川柳』、三省堂、1999年。

²⁶ 東京日日新聞、1872年3月付。

²⁷ 『博物帖』には、1872年頃に博覧会事務局が残した出品に際した注意事項に関する記録が残されており、主催者がどのようなモノを民衆にみせるよう注意していたのかを知るうえで興味深い。そこには、「金石土砂草木鳥獸魚介虫類並製造諸品且珍器ノ品」を差し出す旨が記されている。土石鉱物類は有用無用を論ぜず取り集め提出すること、植物の大きさの指定(半紙半分以下の大きさは不許可)、鳥獸魚貝類の処理の仕方、腐敗した場合の記録方法やホルマリン漬けの方法などが事細かに記され「やむを得ず鳥獸など腐敗した場合には「生活ノ時ノ趣」を記録することなど事細かに注意事項が記されている。

いずれも「自然形ヲ損セス」よう配慮がなされており、時の政府が展示を行う際に、断片的な形のモノでなく、植物や動物、鉱物の全体像、さらには自然界にあった時の姿がうかがえるように注意を促していることがわかる。これは見学者に正確な名称とモノとを結びつけた理解を促すための工夫といえよう。つまり、日常生活で博覧会に展示されていた鳥獸魚貝や鉱物を目にした際に、モノと名称が一致するための仕組みであったと思われる。

28 服部誠一『東京新繁昌記』 1874 年、(龍溪書舎編集部編、『東京新繁昌記』、龍溪書舎、1992 年、p.242)。

29 同前、p.243。

30 同前、p.249。

31 同前、p.251。

32 同前、p.252。

33 同前。

34 宮内貫一(茨城県へ移民)、氏族 平山果『日本開化詩』巻之下 1876 年、出版元中郵熊次郎、pp54。

35 編集出版大久保蔵版、1878 年 9 月 30 日御届、1878 年 11 月 10 日刻成。

36 藤田省三『維新の精神』、みすず書房、1975 年、p124。

37 服部誠一『東京新繁昌記』 初編、第一大区八小区(東京府)：奎章閣、1874 年、(龍溪書舎編集部編、『東京新繁昌記』、龍溪書舎、1992 年、p.246)。

38 同前、pp.246-247。

39 『福沢諭吉全集』第 6 巻、岩波書店、1958 年、p559。

40 なお、ここでモノの見方の変化について付記しておきたい。博覧会がもたらしたモノの見方の変化はその後に大きな影響を残した。その最たる例が百貨店の登場である。

1890 年第、三越、高島屋、大丸、白木や、松坂屋、そごう等の、百貨店が、次々に呉服屋からの転身を遂げる。この百貨店の売り方は、これまでの呉服屋とまったく方法が違っていた。明治初年の店では、従来の近世的販売方法を取り、モノの価値を語りのなかで決定するように仕向けられていたのにたいして、百貨店における販売方法はまさに博覧会の展示空間をモデルとしていたのである。モースは次のように近世的な呉服屋の様子を記録している。

三井の有名な絹店は、それがしない最大の呉服屋で、そして素晴らしい商いをやっているのだから見に行く価値は充分にある。勘定台も席もない大きな店を見ると、奇妙である。番頭や売り子は例の通り葦の畳の上に座る。お客様も同様である。道路から入ると、お客様は履物を脱いで、「一段高まった床に上り、履物はあとへ残しておく。そこで一杯のお茶を盆に載せて、誰にでも出す。買い物をしなくても同様である。(…中略…)」右手は道路、左手にいる番頭達は必要に応じて品物を取り出す巨大な防火建築に出入り出来る。(『日本その日その日』第 2 巻、平凡社、1965 年より)

「極度ののろさとまじめさと丁重さ」であった販売方法は、モースの出身国と「不思議な対照」をなす。近世の性格を色濃く残す店では売手と買手が対人的に向き合い、客が店に入るといことは、たとえ商品を買わない場合も、少なくとも店の主人と脚との間の会話が予見されるが、百貨店はこれらの行為を終わらせ、購入するときは黙って値札を見て支払うという行為へと変容させた。また、この価格表示は「商品の外観も変えた」「商品は今ではもうその外見で、つまり目で見て手で感じられる質で、自らの価値を弁じ、売手と買手の話し合いで初めてその値が弾き出されるものではなく、今ではこの独自の質、その使用価値に値札が被せられている。」つまり、取引的存在と感覚的な特性が失われ、個性を失うとともに、全体的な総体が魅力となるのだ。値札そこに記されたモノの名前を持って、その価値すべてを押し量る試みは、日本国内で見た場合、博覧会が嚆矢であろう。なぜなら、博覧会では多くの場合、展示品のそばには「名称」「出品者の氏名」さらに「値札」が提示してあったのだから。(京都博覧会 2 号 1 丁表)

41 吉見俊哉『博覧会の政治学：まなざしの近代』、中央公論社、1992 年、p. 135。

42 博物館の効率的な運営のために指定管理者制度や独立行政法人の導入された 2000 年頃から、「イベント会場化」する博物館、美術館の教育的意味が問題として議論の俎上にあがるこ

とが少なくない。たとえば、東京都現代美術館では、2005年に人気アニメ映画をモチーフにした「ハウルの動く城 大サーカス展」を開催し、「サーカス一座に扮した人形が並ぶ後者は美術展とは言い難く、中庭に露店が並ぶなどイベントに近い印象」（朝日新聞夕刊、2005年5月19日付）と評され、博物館界のみならず、新聞紙上においても博物館の教育があらためて問い返されている。

43 江戸時代にあって、寿司（鮓）は下賤な食べ物とされていた。

44 品川屋久助『江戸自慢』、人形町通、出版年不明、（早稲田大学図書館蔵）。

45 前掲、『武江年表』、（下巻、p.208）。

46 前掲、『東京新繁昌記』 p.395。

47 その後改訂版がだされ、そこには平面図が追加された。（図）前回と同様の建物配置、庭園、であるが、以前の計画図にはなかった部分が新たに記入されている。それは銅版面に描かれている会場の手前、表門までの通りと、その両側に建物が建ちならぶ、町並みのような箇所。

案内書によると「博覧会場付属売店」とある。

48 美術館は煉瓦造の堅牢な建築物で、博覧会後も使用を計画していた。

49 『明治十年内国勸業博覧会規則帖』1877年、東京大学総合図書館田中芳男文庫蔵。

50 公園内に小憩店、割烹を出すことを「上野公園内地貸地仮条例」「屋台店仮条例」等で規制管理している。

51 これに先立つこと4年前、ウィーン万国博覧会においても同様の試み。この万国博覧会は日本政府がはじめて本格的に参加し、国内で勸業博覧会を開く契機となった博覧会である。日本からの展示：建物内の通常の展示とは別に「日本社園」と呼ばれる小さな神社を中心とした屋外型の展示スペースが設けられる。「博覧会事務官」本館とは別に会場内に並ぶ各国の料理店、産物店、茶店を描いたあと次のように記している。

（…）吾国にてもいささかこれらの用意あり。正堂より南の方（中略）地勢よろしければここを千三百坪ほど囲ひこみ、入口に白木の鳥居をたて奥に白木の神社一字をつくり、（…）左りの方には神楽堂をたて、前には小さき池を穿ち錦魚小亀などを放ち、日本風の反り橋に欄干のつきたるを掛けわたし、鳥居より宮までの道の両側には小さき店三軒つつたて、例年の神祭りのときの社前の市になぞらへ国の名産漆器陶器銅器織物茶烟草などの類より小児の玩ものにいたるまでここにて売らしむ

縁日空間として意図されていた。「これは明らかに江戸以来の開帳、見世物の系譜を受け継ぐものであり、これと同様の考え方が第一回内国勸業博覧会にももち込まれたことは間違いない」（小野良平『公園の誕生』吉川弘文館、2003年、p.112）。

52 前掲、『博覧会の政治学：まなざしの近代』、p.127。

53 前掲、『明治十年内国勸業博覧会規則帖』。

54 これらの展示が大変な人気を博した背景には、西欧から輸入された新たな文化への一般の人々の憧憬の念がある。実際のところ幕末から明治初年にかけて、多くの「舶来」「西洋物」を扱った店が登場している。例は枚挙に暇がないが、いくつかを挙げるとすると、「和漢舶来菓種仕入所」：長門卯之町、「西洋物小間物類」：心齋橋筋唐物町北五入、三木屋元助、「此度英吉利亞墨(ママ)利加ヨリ新々舶来仕度『スペリング』 文法書歴史地理画具の類 絵の具医書新兵書和蘭陀仏蘭西の対字書」「リーゼング・ブック」文法書其外西洋筆墨純地本『ストレート』（後略）横浜本町ハルトリ、「奇なり妙なり。世間の洋服。頭之普西洋衣服類品々

など、洋服や時計、眼鏡など多くの物品が早くも取引されていたようである。これらは、いずれも田中芳男の集に貼り付けられている当時の店のチラシの一部であるが、これの一つみても、一気に西欧の文化が流入し、また、それに対する関心が盛り上がったであろうことが、容易に推測される。（田中芳男『摺拾帖』東京大学総合博物館田中芳男文庫）

55 前掲、『博覧会の政治学 まなざしの近代』 p.146。

56 なお、この傾向は第一回内国勸業博覧会から確認できる。近世より花見や憩いの場として賑

わっていた上野公園入り口には、内務省勸農局が出品した巨大な風車が配置され、開場中央は、不忍池からくみ上げられた噴水の水が勢いよく吹き上げていた。機械館では、蒸気で動く最新製糸機械が数十人の女工によってデモンストレーションされている。内国勸業博覧会は、まさに国家をあげての一大イベントであったのである。なお、開会式当日の入場者は 9220 人、102 日間の会期中の入場総数 45 万 4 千 168 人にも及んでいる。(『明治十年内国勸業博覧会観客日計表』『公文録』1878 年 1 月、2A-10-公 2259)

⁵⁷ 『風俗画報』269 号、1903、pp.35-38。

⁵⁸ 東洋画報「博覧会案内」第 1 巻第 1 号、1903 年 3 月、敬業社、p.54。

⁵⁹ 夏目漱石『虞美人草』1907 年、(新潮文庫、1951 年、pp.154-155)。

⁶⁰ 宮本常一「文字の教育」『庶民の発見』講談社学術文庫、1987 年、p.22。

⁶¹ 同前。